発掘調査の概要

（平城地区）

興福寺中金堂の調査

4月に冬現場班から引き継いでから、はや2ヶ月を経なんとしている興福寺中金堂発掘調査も、いよいよ佳境に入ってきました。

基壇下では、複雑に展開する防災工事配管・土坑・焼け土・整地土との格闘にほぼめどがつき、いよいよ中門・回廊の調査でも見つかっている「玉石敷き」が顔をのぞかせ始めました。また、残っていた基壇の地覆石も外しましたが、その真下の、ほぼまったく同じ位置で凝灰岩が見えつ隠れつしています。基壇規模は創建時から変わっていない可能性が強まってきました。

変わらないものがある一方で、変わるものもあります。南面階段は、1間幅の独立した階段が3基並んでいた時期、それらがつながって5間の階段となっていた時期、それが縮小されて3間になった時期の少なくとも3期の変遷があ

興福寺中金堂発掘現場

ることがほぼ明らかになってきました。基壇に張り付いて残った階段の積み土の状況、巨大な凝灰岩、地覆抜き取り痕跡等々、証拠は着々と積み上げられてきています。

一方基壇上では、地覆石痕跡や石に残された火災の痕跡などから、須弥壇の規模がかつては現状より大きく、前に出ていたのではないかと想定されつつあります。

予定された終了まであと1月余り。独法化最初の、そして平城調査部久々の4人現場班による、1300年の歴史を誇る、日本史上有数の巨大寺院・興福寺との悪戦苦闘は続く。

（平城宮跡発掘調査部）